〈報告〉

長谷川伸『研辰』

出口逸平

今回は小説家・劇作家長谷川伸（1884～1963）の自筆原稿『研辰（とぎたつ）』三十九枚を取り上げる。

長谷川は『瞼の母』や『沓掛時次郎』の舞台・映画でいまも知られているが、これら股旅もののほかに『荒木又右衛門』や『日本敵討ち異相』といった敵討ものも数多く執筆している。

文政十（1827）年閏六月平井外記・九市郎兄弟が、長兄の平井市郎次を殺して逃げた研屋辰次（通称研辰）を讃岐羽床村で討ち果たした事件は、同年九月さっそく歌舞伎『敵討高砂松』となって幕末・明治と上演を重ね、大正十四（1925）年には市川猿之助主演の歌舞伎『研辰の討たれ』（木村錦花原作　平田兼三郎脚色）が評判を呼び、「研辰ブーム」が起きた。長谷川もこの敵討事件について幅広く諸書を渉猟し、短編小説や考証随筆の形で次の四編を残しているが、本作はもっともまとまった形で事件を取り上げた作品ということができる。

①小説『研辰手向草』

『講談倶楽部』昭和二（1927）年十月号（通算17巻13号講談社）に発表され、のち単行本『敵討八景』（1941年春陽堂）に「研辰（讃岐南羽床）」と題を改めて収録された。

②エッセイ『研辰の討たれ』

『文芸春秋』昭和七（1932）年七月号に「『仇討異相談』―（其の二）―」の副題を添えて発表され、のちに単行本『考証読物集』（1933年　岡倉書房）に収録された。

③小説『研辰（とぎたつ）』

初出誌未詳。昭和二十七年頃の執筆と考えられる。自筆原稿三十九枚が、大阪芸術大学図書館におさめられている。

④エッセイ『研屋辰次』

『日本古書通信』昭和二十八（1953）年九月号に発表され、のち単行本『材料ぶくろ』（1956年　青蛙房）に収録された。

自筆原稿には編集者の手による割付の跡が残っているにもかかわらず、これまでの調査では初出誌は不明で、本作に触れた批評等も見当たらない。このまま埋もれさせるにしのびず、まずは作品本文を公開したうえで後考を待ちたい。

執筆時期は、作品冒頭の「これが百二十五年ばかり後々の今でも、悪名の故に記憶されている研辰である」の一文がヒントになる。研辰が亡くなったのが文政十（1827）年、したがって「百二十五年ばかり後々の今」は昭和二十七（1952）年前後とみていいだろう。

作品の典拠としては、まず膳所藩士だった平田好（磧水）が明治四十一（1908）年に出版した郷土本『懐郷座談』があげられる。その中に「膳所平井氏復讐」と題された一文が収録されている。敵討直後の文政十年八月に、讃岐高松藩士「杏隠老漁陸保」と名乗る人物が記した漢文記事である。この本は長谷川自身が発見した新資料であり、エッセイ『研辰の討たれ』や『研屋辰次』では実例を上げて、記事の信憑性を証している。また敵討当日の経緯と後日談には曲亭馬琴の筆録編集による『兎園小説拾遺』（1829年頃成立）を引き、さらに福家惣行『讃岐人物伝』（1914年）まで援用して、事件考証に努めている。詳しくは別稿であらためて検討したい。

旧作『研辰手向草』に比べれば、事実関係の正確さはもちろん、作者の人間観照の深まりと情景描写の巧みさがうかがえる好短編といえる。

なお翻字にあたり、旧漢字等は適宜現行のものにかえた。また送り仮名はすべて省略した。

『研辰（とぎたつ）』

長谷川伸

（一）

江州膳所六万石の城下から瀬田の長橋をわたつて道を右にとり、田の上の不動へゆくにはと尋ね尋ね、二十五六の旅の男がゆく。着換入りらしい小風呂敷を背に負ひ、肩にしてゐる浮世道具の紺布包みに、晒木綿で巻いた二三本の刀身に当板をして結びつけてゐるので、刀研ぎの職人であるとすぐ判かる、これが百二十五年ばかり後々の今でも、悪名の故に記憶されてゐる研辰である。本名は与之助で辰蔵は通称、一般には研屋辰次で知られてゐる。辰蔵は寛政八年の生れ年が丙辰だつたので、丹波の亀山で刀研ぎの職をおぼえ文化十二年の春年季奉公があけたとき、与之助では子供臭いと他人もいひ自分もさう思ひ、辰蔵と改めた。この通称は事件を惹き起して逃亡してからは使はず、本名の与之助を、殺されるまでの四年ばかりの間再び使つた。

辰蔵は中肉中背で、顔立ちはどつちかといへばいい方で、眼だけが人並より大きかつたが、それは愛嬌にこそなれ、他人に警戒されるやうな鋭さなどはなかつた。

ゆうべは膳所で泊り朝のうちに発つて、五里歩いたので田ノ上山にある岩屋不動を麓から仰ぎみた頃は、残暑の西日に照りつけられて汗みづくになつてゐた。辰蔵は麓に並むである茶見世の前を素通りして、山頂にある大神山成就院不動寺の住職で密禅といふ、三十七も年上の同郷同村の老僧を、庫裡へ行つて訪れた。讃州高松領羽床（はいか）村の下村（しもむら）の者で与之助が来たと聞くと、密禅は驚き喜むですぐ会つた。密禅はおなじ羽床村の生れで、辰蔵の幼少年のときをよく知つてゐたし、俗縁からいへば遠いながらも血のつながりがあるのである。

辰蔵は五ツの寛政十二年六月十一日、父の与太郎に病死され、その後は母の手一つで育てられたが、父がゐてさへ小作稼ぎの貧しさが、母一人子一人になると食ふに食へない貧しさに陥つた。その中で母は生ひ先の永い伜には手に職を付けたいと思ひ立つた。この侭では辰蔵が成人するまでに田一枚畑一枚譲れるどころか母子ともども飢え死ぬ時がやがて来るだらうと、気が勝つた女だけに思ひ切りもよく、辰蔵が十歳の文化二年の春、世話する人があつたのを幸ひ、海を隔てて遥々の丹波亀山松平五万石の城下西ノ町にあつた刀研師有福喜左衛門の徒弟にした。このことは不動寺密禅が高松の寺にゐて、羽床の寺と兼勤のときであつたので知つてゐた。辰蔵が十五歳の文化七年十一月六日、日雇稼ぎで一人口をどうやら過してゐた母が病死した。このとき密禅は京都に上つて一寺の住持をしてゐたので、後にそれを知つただけであつたが、文化十五年が文政元年と改元になつた年の八月、二十三歳になつた辰蔵と法筵の帰途に粟田口で行き会つた。旅仕度をして道具包みを肩にかついだ辰蔵はそのとき、十年の徒弟奉公をすませ、一年の礼奉公も勤め、一人前の職人になりはしたものの、いつになつたら一戸を張り、刀研の見世がもてるか目算がつかないので、今は旅から旅の渡り職人になつてゐる。故郷といつても名ばかりで、懐しいのは言葉をかけてくれない山川草木だけ、親類はあつても血のつながりの遠い他人同然のものばかりと、そんな風なことをいつて、別れを告げて行つてしまつた。このとき以来密禅には辰蔵を憫む気が起つてゐた。それから足掛け三年目に旅の窶れもない辰蔵が、出しぬけに田ノ上へ訪れて来たのである。辰蔵はいふのである、旅から旅への渡り職人では先々の心細さがこの頃よくわかつて参りました。どこでもいいから居着いてくらしたい、あしたの朝また草鞋を穿いて出てゆくくらしが悲しくてならないのでございます、と。

大神山不動寺は今のいひ方だと、滋賀県栗太郡下田ノ上村大字森にある。大正十三年度に特別保護建造物に指定された程の古刹で、江戸時代には正月と八月と年二度七日続きの会式には、近郷はもとよりのこと、京阪地方から信者が夥

しく集まり、苞にはひつた塩を奉納するといふ慣例があつた。辰蔵が密禅を訪ねてきたのは、八月の会式の前だつたので、密禅は、人手がいくらあつても足りない折だから当山の会式を手伝へ、そのあとで研屋渡世の途を何とか考えてやるといひ、その日から辰蔵は当分のうち不動寺の手伝ひ人になつた。

これが文政三年七月十九日のことで、辰蔵は二十五歳であつた。勿論数え年である。

会式とその前後の数日を辰蔵は、骨身を惜まずよく働いた。骨身を惜まむぬ働き振りは、その期間中だけでなく、不動寺にゐる足掛け四ケ月の間、いつもさうであつた。

その年の十月の下旬に密禅が、辰蔵をつれて山を下り、膳所の東ノ町の不動寺に同居させた。椿原の不動寺は膳所の十ケ寺の一ツであつたが、明治二年の廃仏棄釈の恐慌時代に叩き潰され、今はなくなつてゐる。ここの不動寺は田ノ上の不動寺の別寺で、密禅が住持の里坊で、敷地は十七間に十九間だから広くはないが、信者の多い田ノ上不動の出張所なので、本堂は小さいながら荘厳さを失はない建築で、住持の部屋などの外に、ちよつとした客間のある建物や、寺男の嘉兵衛夫婦の住む家もあつた。密禅は月のうち二度は役僧を随へ又は単身で下山し、ここへ来て護摩の執行や信者との面接をやつて山へ帰つてゆく。

留守居は嘉兵衛の役であつた。

辰蔵がここへ連れてこられた時は、研屋の開業はあしたからでいいやうに事がはこばれてゐた。膳所藩では社寺支配は大目付であつたので、不動寺留守居人嘉兵衛の同居といふことで、辰蔵の居住を大目付から承認して貰つてあるし、開業のことは町屋支配の町奉行の承認をうけてある。それだけでなく密禅は、既に下話がしてある藩士十余人の許へ、辰蔵をつれて行つて引合はせた。その中の一ツが後に辰蔵が二人を殺害し一人を傷けるやうな事件を起した平井市郎次の宅である。平井の家は中追手門を出ると左右とも両側に商家が立ち並むでゐる、その左（東）の方の上浜田町のうしろにあつた。北角からだと三軒目である。

（二）

膳所の城は本丸の全部が琵琶湖の中に突き出てゐるので、明治二年廃城となり取り毀すまで二百余年にわたり、旅行者を楽ませて余りあるものであつたが、そのことは研辰と余り関係がないが、辰蔵がここに足掛け四年満二年十ケ月ゐるうちに、狭い城下の世間話に出なかつた筈はないとみていいことは、芭蕉の門人で人を斬り殺して自殺した曲翠・菅沼外記定常のことである。外記が奸を除くといふ趣意で曽我権太夫を討果したのは享保二年で、辰蔵が膳所に住むやうになつた百十余年も前のことだが、権太夫討ちも外記の自殺も椿原東の町不動寺の向ふ側の外記の宅での事だから、だれかしらから聞いてゐただらう。辰蔵の伎倆がいいので翌年の春過ぎた頃には、人に多少は知られた研師となつた。随つて収入もあり、活計を密禅から助けて貰はないでもいいやうになり、ぽつりぽつりながら金も溜まりかけたので、ここで一生を送る気が本当に固まつてきた。渡り職人をして来ただけに女の肌を知らないのでもないが、密禅への遠慮もあつて女遊びを慎むでゐるのが、知合ひになつた人々の間で好評のタネになつている。その一方で、一生を共にする女はないかと、いつからともなく気を付けるやうになり、幾人かに眼を惹かれたその中で、この女こそと惚れ込むだのが、近くの紺屋町の魚屋にゐる年は二十のおしもといつて、色の白い瓜実貌で体つきのすら（「と」を欠くか―出口）してゐる、その頃の慣ひからいへば娘としては少し薹が立つた女であつた。これが辰蔵が膳所に居着いて満二年たつた、二十七歳の冬の初めである。

不動寺の寺男嘉兵衛夫婦が気がついて、辰蔵に聞いてみると実はといつて、前と違つて色が白くなつてゐる顔を赤らめ、打明ける一語づつが熱く、女を想ふ一図さが、五十を超えて子のない夫婦の胸を打つたので、それ程に惚れ込むでゐるのならと、夫婦の方でも乗気になり、魚屋夫婦に先づ話を持込むと、魚屋夫婦も辰蔵が褒め者になつてゐると知つてゐるので、それではとおしもの親許に話を持つていつた。おしもは北追手門に近い大津町縁心寺門前の按摩で鍼も打つ才賀の娘

であつた。本人のおしもが辰蔵の眼が人並より大きいのが気に入らないと、ただ不満はそれだけであつたので、この縁談はすらすらと進み、婚礼は嘉兵衛夫婦の仲人でその年の十二月中旬にあつた。辰蔵は恋女房を迎えたので有頂天にその日その日を送つた。

翌年の二月朔日、藩士は礼装、中間小者は染色鮮かな仕着で、城下の町々に姿をみせる御祝儀登城の日、おしもは大津の親の家へ一晩泊りに行つたのが、二晩泊りになつて三日目に帰つてきた。後で辰蔵は思い出したが、得意先の平井市郎次から碁の対手を申しつけられてゐたので、朔日の午后にゆくと不在であつた。翌日の午后又行つてみたが矢張り不在であつた。大津町の才賀方にも寄つたが、おしもは来てゐるとはいつたが姿がみえなかつた。おしもが市郎次と二晩がかりの媾引をしてゐたと、辰蔵はまだ気を廻はす程になつてゐないので、その時は先づ先づ無事であつた。

平井市郎次の先代は才兵衛といつて優れた馬術家でもあつたが、馬医者と同様な技量があつたので、組頭の組下で六十石の馬廻りの士である一方で、用人支配の下に馬医の役をも勤めてゐた。男三人の子があつて長男が市郎次、細身の体で勇気も決断も欠けてゐたが、読書が好きであつたので、十七歳のとき志願を藩に立てさせて、江戸の馬医者の塾生にしたところ、幸ひに成績がいいらしいので、平井の家督は馬医者として市郎次が継ぐものと思ひ、次男の才次郎（孝之）は江州水口藩二万五千石の加藤家の武内家へ養子にやつたので、この方は姓も名も武内策次と変つた。三男は九市郎（孝安）といひ、市郎次とは十一違ひ、策次とは六ツ違ひで、部屋住であつた。

ところが市郎次はおなじ塾生の中に、俊才が二人もゐて、後から来て追ひ越し、奥義を早くとつた。これが心に大きな打撃を与へ、次第にひねくれた物の見方をするやうになり、師匠も塾生も扱かひかねた結果、厄介払いの意味も幾分あつたのだらう、皆伝の証を与へ藩へ帰らせた。それと同時のやうに父才兵衛が病歿したので、市郎次は膳所へ呼び戻されて家督相続を許され、馬医者になつたが、経験の浅さばかりではない未熟さがあつたので、日に日に評判が悪くなつたのが耳にはひつた為めだらう、江戸で修業の頃のひねくれに、もう一ツ輪をかけたものになつたので、嫌悪するのは他人だけではなく、迎えて程もなき妻にすら離縁をとられた、その後は独り身でゐたが、度外れた行状がたびたびあつたのが理由になつて、藩の命令で隠居を申付けられ、六十石の家禄は末弟の九市郎に相続を命ぜられた。これが昨年のことで、市郎次は今年二十八歳でしかない、末弟九市郎は十七歳であつた。

辰蔵は刀研ぎをするときは不動寺にゐるが、藩士の宅などを得意廻りに出歩くことも少くない。刀その他を鑑定しろと呼ばれもする、碁の対手など申付けられもする。さうした留守の間におしもが、嘉兵衛夫婦も知らぬ間に出てゆき、だいぶ時たつてから赤らむ顔でこつそり帰つてくることがたびたびになつたので、嘉兵衛夫婦はそれを辰蔵には知らせず意見したが、証拠を突きつけての意見ではないので、おしもが事もなげに言訳をいふ、ただそれだけでいつも終りになつた。

そのうちにおしもと平井市郎次が、どこそこできのふ媾引してゐるのを見たといふ者が、親切なつもりで辰蔵にそつと知らせたが、おしもに限つてそんなバカな事がと、辰蔵は頭から笑つて信じなかつた。しかし同じやうな事が幾人もの口から聞かされると、辰蔵の心のうちに疑惑の火がぽつりと一ツとぼり始めた。

春が過ぎてめつきり夏めいて来たころ、おしもが体を辰蔵に拒むだ一夜があつた。翌日から気をつけてゐると、内々でどこかで煎じた薬をおしもが飲むでゐるのを見掛けて辰蔵は、おしもに隠れて新しい土瓶の中の煎じ薬を嗅ぎもし舐めてもしてみたが、どういふ薬やら見当がつかないので、その晩おしもに尋ねると血の道の薬だと軽く答えたので、辰蔵はああさうかと思ひ、当分のうちおしもの足に自分の足を触れさせることさへ控えた。

三四日してから市郎次の門前を通つたので、機嫌伺ひに立ち寄ると、市郎次が縁先で青白い顔を獅噛めて煎じ薬をのむでゐた。その匂ひといひ、おしものむでゐる薬とおなじやうだつたので、何のお薬でございますかと尋ねると、これかこれは下の病ひの名薬よといつてから、何としたことか市郎次の顔の色が変つた。が、辰蔵は市郎次が売女漁りをする噂を早く

から聞いてゐたので、悪い病ひをどこかでうつされたのだらうと思ふだけで、話を外のことに切り換えた。

辰蔵は不動寺に帰つておしもの顔をみると、今まで思ひつかずにゐた疑惑が心のうちに出てきて、平井様がお前とおなじやうな薬をのむでゐたが、お尋ねしたら下の病ひの薬だと仰有つたが、何故かその途端にお顔の色が青くおなりなされた、あのお方はいつも青いお顔だが、それとは違ふお顔の色になつたと話すうち、おしもの顔が一時は赤くなつたがみるみる青ざめ、辰蔵がどうしたのだと問い詰めても答へず、おかしいではないかお前は平井様とおなじ下の病ひの薬をのむでゐるのかと、言葉数につれて執拗くなつて責め問ふと、おしもが眼を光らせ、そんな事をいふのなら、今から平井様へ二人でゆき何と仰有るか聞かうといひ出した。不評判な隠居の身でも市郎次は六万石の本多隠岐守康完の家中の士、他国者の刀研ぎでは身分が違ふので、辰蔵が鼻白むでゐるとおしもが、あたしは先に行くお前さんはあとから直ぐ来るがよいといひ棄て出て行つた。おしもはその足で大津町の親許へ泣き込み、辰蔵の嫉妬がひどくて居耐うないと、今までいつたことのない亭主の悪口を泣き喋べりした。

辰蔵は慌てふためき、嘉兵衛に市郎次の処へいつて貰つたが、おしもは行つて居らず、自分で大津町の才賀方へ行つてみたが、来てはゐないといふ。紺屋町の魚屋その外、心当りを探したがおしもはゐなかつた。翌日嘉兵衛が才賀方でおしもを見付け、親夫婦に親類二三人が加はつて、おしもと嘉兵衛を中にして、話をつけるとなつたものの、おしも一人だけが、辰蔵の嫉妬が怖いから今のうちに別れたいといひ張るだけで、親も親類も嘉兵衛も、辰蔵は先々に見込みのある男だから、元の鞘に納まるのがだれに取つてもいい事なのだと思ひ、禍根が残ると気がつくものなく、おしもの説得にみんなでかかつた。おしもは平井家に奉公中、市郎次に体を任せたことがあり、それが知れて追い出され、中絶ゑて久しくなつた間に、辰蔵と夫婦になつたが、この頃は市郎次と以前とおなじ仲に又なつてゐると、隠しごとまでブチ撒けたが、それは辰蔵の耳に入れぬやうにして、行ひを慎めば今までの事は過ぎた昔となつて消えてしまうといふ、裂け目に目張りの事勿説が、おしもを押さへつけて、たうとう承知させてしまつた。

おしもが不動寺へ連れ戻されてから三四日のうちは、辰蔵は喜び勇むでゐたが、その後は変はつた。辰蔵にはこの女が夜だけ恋女房であることに変りないだけで、朝がくると枕につくまでは、知らぬ間に他人に偸まれて娯み道具になる女といふ見方が日毎に出た。さうなつてからの辰蔵は、臍の穴のゴマまでとつてやる可愛り方が、食べかけの茶碗の飯も飯桶の余も、溝川に抛り込むで食べさせない虐め方にあつといふ間にすぐ変はるのが三日にあけずであつた。

かうして七月の盆祭が近くなるまでに、辰蔵の顔の色が悪くなり、大きな眼から愛嬌が消え失せ、時には他人と世間話のうちにほろりと涙を頬に光らせることもあつた。おしもは見たことろ何の変りもないが、体に生疵が殆んど絶ゑるときがなかつた。が、さうなつてもおしもは市郎次については、以前のこともこの頃のことも、お前さんが邪推をしてゐるのだといひ張り、口を割らなかつた。辰蔵はこの時もまだ、突きつける証拠らしい物は何一ツもつてゐなかつた。

（三）

市郎次とおしものことが人の噂になつた為めだらう、平井の縁者で大須賀町の布屋多左衛門が辰蔵を呼むで、今日の話は内証であるから決して他人にいふなと前置きして、市郎次から詫び金五両を出させるから、今までのことは水に流してくれまいかといひ出した。布屋は辰蔵が証拠を握つてゐながら地位の違いでどうにもならず、跪いてゐるものと見てとつて、金で落着をつける気であつたが、辰蔵にしてみればこれで始めて確証を得たのであつた。布屋はたださう云つただけでなく、お前が不服をいふのなら多分お前はここに居られなくなるだらうと、暗に本多六万石の権勢は他国者の一人ぐらゐどうにでもなると仄めかせて、脅しの圧味を可成り加はへた。辰蔵はこの脅しに怖れをなしながらも渋り抜いたが、遂に承知すると布屋が、これでお前も安泰だと金五両を前に置き、証文を書けといふ。辰蔵が筆をとつて二三行書くと、但し書きにしもと離別致す可く候と一ケ条入れろといつた。それを拒めば不審に存

じ候といふだけの理由で、当所から追い払ふ御沙汰が出るだらうと脅した。辰蔵は手の指まで青ざめさせて、布屋のいふ通り証文を書いて渡した。

五両の金をふところに辰蔵は、足許の小石にも心づかず、不動寺に帰つてみると、おしもが家出したあとであつた。

これが重陽の御祝儀が城の中であつた、八月朔日の前三日のことである。

その日の夕方、辰蔵は引きとめる嘉兵衛の手を振り払つて、市郎次のところへ行つた、おしもの居どころを聞きたかつたのであるが、市郎次は縁先で江戸風扇を手にして蚊を追ひながら、研辰お前の証文を先程みた、これで一切の埒があいたなと、バカ笑いをしたが急にやめて、用は何だと怖い眼を向けた。辰蔵が恐る恐るおしもの居どころを尋ねると、知らぬなあの女で、金五両俺は損をしたと、すっと起つて刀を手にとり抜き放つたので、辰蔵がびくりと逃げ腰になると、市郎次はその刀身に打粉を掛け手入れをやり出した。

その晩、辰蔵は泥酔になつて不動寺に帰り、嘉兵衛夫婦に介抱されて蒲団の中にはいつたが、夜明けまでに二度も泣き声がしたといふ。

翌日から辰蔵は仕事も得意廻りもせず、おしもは親の家にゐないので、隠れてゐさうなところを探し歩いた。一ぺんだけ会へばいい、会って去り状を手渡し、今までとに角も世話になつたのだから礼をいつて、綺麗さつぱりに別れたいと、行く先々でいつたのが、顔の色は悪いし、眼は大きいしで、誤解されがちであつた。辰蔵をよく知つているものは、あの男はバカなことを決してしないといつたが、知合ひでないものは、女を殺す気だからあんなにうろ付き廻はるのだらうと噂し合つた。辰蔵にまだその頃は殺意などはなかつた、泣き悲しむでゐるだけである。

おしもが居なくなつて、九日目の八月七日（文政六年）、朝早く田ノ上を下山した密禅が、膳所の不動寺に着いて、遅い昼飯の箸をとりながら、嘉兵衛の外にだれもゐないのを幸ひ、情理の立つた意見を辰蔵にみつちりした。密禅はこんなことは時がたてば、疼かない古疵同様で、たいした痕が心に残らないものといふ考へ方で、どつちかと云へば情の方面がそれ程深くない、理屈が勝つた意見であつた。辰蔵は恐れ入つて、その意見を身に沁みて聞いた。

密禅下山と知つて幾人もの客がきて、いつもの通り客間で碁がはじまつた。辰蔵はこれもいつもの通り客の世話をしたり、碁の対手にもなつたりしてゐるうちに、腹ぐあひが悪いらしいので厠にはひつたのが、蜩の鳴きしきる頃であつた。聞くともなし耳にはひつた外の話声は嘉兵衛夫婦で、おしもはあした京都へのぼり、尼寺へはひるさうで、こつそり紺屋町の魚屋へ、暇乞ひに今きてゐるさうだ、怖がらずともいい辰さんを怖がつてのことだらうが、このことはあすになるまで辰さんに聞かせないがいいかしら、といふ相談であつた。

辰蔵は嘉兵衛夫婦が居なくなつてから厠を出た、密禅の意見が耳にまだ残つてゐるので、魚屋へすぐにも飛むでゆきたいのを、我と抑えて客間へ戻ると、今やつて来て密禅と碁を囲みにかかつてゐる、殿町の羽賀なにがしといふ四十年配の藩士が、刀研ぎなれば刀がない訳でもあるまいに、女房をとられて金で堪忍するとは恥晒しの奴だ、口をきくさへ厭な男がそこらにゐると罵つた。密禅が手を振つてその言葉を遮り、何かいひ出したのを辰蔵は聞かなかつた。羽賀は批評のつもりだつたらうが、事実は煽動の役に立つた。辰蔵は研ぎに出てゐるうちの目貫をまだ抜いてない一刀をふところへ押込み、雀色になつてゐる夕暮れの街へ、刀はあるともあるともと口のうちで呟き続けて出て行つたのを、だれも知らなかつた。

伊勢屋町へ出て紺屋町へ曲がつた辰蔵は、稲荷神社の横へ蝙蝠のやうにふわふわとはいつた、そこは稲荷浜といつて湖がすぐなので水の香が高いのだが、辰蔵はそんなことに気がつかず、裏の方から魚屋の家の中を見詰めてゐると、厠からおしもが出てくるのを見付けた、あすは尼になるので俗のすがたに名残りを惜む気なのだらう、嫁入り前の娘さながらの華やかさであつた。おしもは近づく辰蔵をみると、あつともいはず棒立ちになつた、その二の腕を辰蔵は掴むで、さつき灯がはひつたばかりの常夜燈の脇を横切り、稲荷浜へ連れ出した。湖の彼方の昏い方から吹きつける、やや強い浜風の中の男の口からも女の口からも出るものは低い笛のやうな呼吸だけである。

（四）

辰蔵が平井市郎次のところへ来たのは、行燈に灯がはひつてからであつた。よい出物の刀がございます、お買ひ上げを願はないでもご覧くだされますだけで結構でございますと、辰蔵は手にさげて来た一振の刀を出した。市郎次は風呂あがりで晩酌の後らしく、浴衣を引つかけた丸腰で、煙草を喫つてゐた。その脇には市郎次の母と伯母とがゐた。どれどれ見せろ、辰蔵あの女はその後どうした、俺はあいつにも手切れの印に三両とられたといひながら、刀を無雑作に抜いて行燈の灯にかざしたのが胡坐の侭である。市郎次は武士の作法を成るべく守らないやうにしてゐる、それは辰蔵も見慣れてゐることであつた。こいつは一見の値打もない鈍刀だが、おや妙だ、この刀は臭いなと市郎次は血曇りは見落したが、血臭いだけは嗅ぎつけた。左様でございますか、そんな筈はないと存じますがと、辰蔵は刀を受取つて検める振りをして、出し抜けに起つて市郎次に斬りつけ、左肩を右手で押へて逃げるその背後から突いた、致命傷にこれがなつた。母と伯母とは辰蔵を捉へる気で、出あへ出あへと叫びながら掴みかかつたが、辰蔵が振り廻はす刀に伯母が傷を負ひ倒れたので、母は狼藉者狼藉者とただ叫ぶだけになつた。辰蔵は血刀をさげて、青くなつた顔を膏ぎらせ、血刀をさげて座敷の中をうろうろしてゐた。

九市郎はそのとき、厩舎にゐて母屋の騒ぎを聞きつけ、駆けつけたが凶行者が逃げた後であつた。母が辰蔵が辰蔵がといつたので研師のあいつかとわかつた。市郎次は殆ど即死であつた、寛政八年生れであるから辰蔵とおない年である。伯母は軽い疵だが自分では死ぬかと思ひ、気落ちがして平太張つてゐた。

辰蔵はそれつきり行方知れずになつた、凶行につかつた刀は、門の内側に棄ててあつた。おしもの死体はそれから一刻もしてから魚屋の家のものが、稲荷浜で半分水びたしになつてゐるのを見付けた。

文政六年八月七日のこの事件で、膳所藩は犯人の追捕を五日間で切上げた。領分内に最早ゐないらしいから、費用のかかる捜索は続けない、あとは文書の上だけの探索継続となり、やがてそれも取消さない取消しと、実際の上ではおなじになつた。

九市郎は居合わせながら曲者を取り逃がしたといふので先づ謹慎を命ぜられた。町屋のものの説では、怖いので駆付けを手間取らせたのだと散々の悪評であつた。九市郎は怖気たのではなく、馬の手入れ中だつたので、騒ぎを聞きつけるのが遅かつたのである。が、九市郎はそのとき後のことは母と伯母と二人の使用人に托して、辰蔵を追跡すべきであつた。兄の出血の夥しさと伯母の負傷に気を奪はれ、その介抱にのみかかつたことが、十七歳にもなつてゐるのに、藩士の間でも頗る不評であつた。やがて平井家は断絶を命ぜられ、市郎次の葬儀にも厳しく制限をつけられた。

九市郎母子は住み慣れた宅を明渡し、菩提寺に一先づ身を寄せ、伯母は親類の貝崎藤内に引取られた。貝崎は藩の給人である。

田ノ上の密禅は辰蔵を城下に手引きした責任で七日間の閉門の処罰を大目付から申渡された。

水口藩で二十三歳になつてゐた武内策次は、兄が殺され、弟が卑怯者にされ、家は断絶となり、世の噂が至つてよくないので、敵討による名誉恢復をする気になり、養父母に離縁を乞ふて許されたので旧の平井才次郎になつて膳所へ帰り、九市郎と連名で敵討の免許願ひを、藩に二度出したが却下された。兄市郎次の悪評と弟九市郎の不評とが祟つたのである。その反動のやうに辰蔵には同情が可成り寄せられた。堪忍金五両を受取つたのはまづいが、兎に角も間男の成敗だからといふのである。

ここに至つて才次郎に反発がきびしく出てきて、無免許で敵討の挙に出て、更めて世人に対面してやるとなり、八月七日の一件以来いぢけてゐる九市郎を励まし、平井外記と改名して翌年の春、京都まで先発しその途中で辰蔵の足どりを調べあげたところへ弟が追ひついて来たので、二人連れ立つて丹波の亀山へ向かつた。辰蔵の足どりは京都までで消えてゐるのであつた。辰蔵は亀山の旧師喜左衛門に音信をずつと欠い

てゐるくらいだから、亀山での探索は空しかつた。それでは京都から但馬へ出て、山陰道へ行つたかも知れずと、但馬へゆき因幡から伯耆と探し歩いたが得るところなく、京都へ引き返したときは親類縁者が醵金の旅費がなくなつた。そこで外記は京都で明闇寺派の普化僧となり、幡龍と名乗つて西国筋を探索し、九市郎は大阪に出て天満与力の僕となつて探索したが、わからないので江戸へ下つて日雇稼ぎをして探し、越後まで行つたが矢張り空しかつたので北陸路をとつて京都へ出たとき、西国筋から空しく引返してきた外記に会つた。これが文政九年の秋で、発足してから既に足掛け三年で外記は二十六歳、九市郎は二十歳、兄は旅の辛苦を身につけて人間が成長し、弟は体も逞しくなり肝も太くなつてゐたが、怒りつぽくなつていた。兄弟ともに旅費がないので、九市郎も明闇寺派の普化僧にして貰い、鉄腸と称して、二人連れで中国筋を行乞しながらの探索に向かつた。

その途中で行き合つた二人の普化僧が、外記の幡龍が大刀を隠し持つてゐるのを見付け、殺生禁制の虚無僧が刀刃を携ゆるは奇怪なりと作法の通り虚無僧の資格を剥ぎて罪を糺さんと詰め寄った。外記はむかつ腹を立てる弟を抑えて詫び入つたが許さぬ許さぬと対手は猛り立つ、ところへつれとみえ、又一人の普化僧が来て仲に入り、この者は曰いまだ浅きなり、このたびに限り許しやらん、再び犯さばそれがしが処分すべしといつてくれたので事なく済むだ。外記がその普化僧に礼をいひ、名を聞くと、手短く雲龍と答へたのみであつた。

その年の冬初め備後の三次で兄弟は再び雲龍に行き合つた。そのときの雲龍は独りであつたが、外記が相変らず大刀を隠し包にして持つてゐたので、先ころの事もあるに改めざるは何故ぞと、大きに怒つて叱つたので、外記は弁解の言葉に苦しみ、実は敵討の者なりと打明けた。九市郎も今度は素直に兄共に頭をさげた。雲龍は言葉鋭く追及し、それに答える外記の言葉を又も追究し、判断がつくと急に気色を和らげ、今は疑ひなし、おなじく虚無僧の身なれば義として棄て去るべきに非ず、及ばずながら助太刀いたしたしといつた。兄弟が喜むでそれを受けたので、雲龍は拙者は周防岩国藩吉川家の浪人にて黒杭才次郎といひ、享和二年の出生と告げた。さうするとこの時は二十五歳である。

三人で相談して九市郎は雲龍と共に、海路をとつて九州に渡つて探索し、外記は中国筋に残つて尚も探索するとなり、落合う時期を十二月とし、場所は備後徳山在の虚無僧寺と決めて、左右に別れた。

外記は辰蔵の生れ故郷は、讃州阿野（あや）郡羽床村の下村と聞いてはゐるが、故郷に思慕をもたない男だつたと聞いてゐたので、故郷探ぐりをやらなかつたのを思ひ出し、ムダと思つて行つてみたところ、辰蔵の本名が与之助で、丹波で年期奉公に母親の墓参に一度戻つて来ただけで、その後永らく音沙汰なく、亡くなつた母親のゐた家も久しく立ち腐れになつてゐたが、いつかの暴風雨に潰れて今は跡形なしになつてゐると、これだけが収穫であつた。

十二月になつて備後で三人が落合つたが、辰蔵の居どころが皆目わからないので、中国辺を連れ立つて歩き廻り、翌年の六月六日に船で伊予の今治に渡つた。外記の幡龍は二十七歳、弟九市郎の鉄腸は二十一歳、黒杭才次郎の雲龍は二十六歳になつてゐた。雲龍はそのころ四十年配にみえたといふ説もある。

三人はこれから松山から宇和島の方へゆかうか、讃岐の方へゆかうかと、話のうちに外記が近くにあつた神社にゆき、神籤を抽いて戻つて来た。文面を判断すると讃岐へゆけといふ意味があるやうにとれた。今度は九市郎が行つて神籤を抽くと、同じ文面のものであつた。そこで讃岐へとなつた。伊予での話では、讃州は普化僧の立入りを禁じてゐるといふので、外記と九市郎は装束一切を売払つて乞食に扮したが、雲龍は禍福は問ふところでなし、拙者は虚無僧で参るといつて、姿を変えなかつた。

善通寺まで来た三人が、茶店の脇で憩むでゐると、茶店に三人の客がゐて、与之助ぐらゐの刀研ぎは善通寺・多度津にはゐない、丸亀・高松にだつてどうだかといふのを聞いて、雲龍がそばへ行き、与之助とかいふ刀研の名人はどこに住むのかと聞くと、これから東の山の中の村で羽床下村にゐるといふ、老人かと聞くと、三十四五だといふ答へであつた。

（五）

文政十年（一八二七年）六月十一日が暮れて間もなく、外記・九市郎と雲龍とが、暗きに紛れて、羽床下村の刀研ぎ与之助の家近くに現れた。兄弟は乞食姿、雲龍は天蓋など邪魔と思へるものは、その先にある無常場（墓地）に置いてきたので、これも乞食のやうにみえないこともなかつた。与之助方には幾人も客がきてゐて、法事の振舞ひらしかつた。後にわかつたことだが、去年の秋深くなつてから、与之助が独りで出しぬけに帰つてきて、庄屋の米田伝右衛門方へゆき、村に住み着く許しを受けて、空家があつたのを買つてはいつた。その家は二間四方で、はひると土間があつて一間きりの小さいもので、家の周囲には山の尾端が出てゐた。西は水田、東は谷である。煮焚きの世話は村の女を雇つてさせ、刀研ぎの仕事は善通寺や多度津・丸亀に、日を定めて出ていつて見付け、持ち帰つて仕上げて届けるといふやり方で、伎倆がいいので仕事は少なからずあつた。六月十一日のその日は辰蔵の亡父の祥月命日ではあるが、二十三回忌には五年も遅れ、三十三回忌には五年も早い——母の十七回忌にも一年遅れてゐる——が、永らく不参であつたからといふので、故郷に居着いて最初の祥月命日のこの日に、亡父の法事振舞ひをやつたのである。

と、詳しいことは平井兄弟も雲龍も知らなかつたが、人が来てゐては傍杖を食はせ、想はぬ迷惑をかけるや知れずと、村の墓地が近いのでそこに引揚げ、夜明けを待ち、辰蔵の寝込みを襲ふことにした。

六月十二日の朝が明け初め、三人の眼に映つたものは、男ばかり二三人づつが組になり、村の中を歩いてゐる姿である。非常に備へてでもゐるらしくみえるが、辰蔵が様子を覚つてかうなつたとは思へない。何かあつたのだらうと、三人とも飲まず、食はず、用心深くその日の午后まで墓地の中に隠れてゐた。

これはゆうべ村の伝蔵方へ泥棒がはひり、だいぶ物を盗まれたので庄屋が指揮をとつて、泥棒を探した、それであつた。が、泥棒は村の中から逃げて出たらしくないので、金比羅源右衛門といふ近村にゐる目明しが頼まれて、手下を二人つれてやつて来て、墓場に乞食が三人ゐるといふ村の人の注進を聞いたのが、日が西に傾いたころであつた。それつと勢ひ込むで行つてみると、善通寺で買つたか貰つたかの餅の紙袋があつただけであつた。源右衛門はあすこへ上つてみろと手下をつれて、山の尾の端の一つに駆けのぼり、眼の下の村一帯を見廻はすと、二三町も先の小径を三人の乞食が行く。あいつフン捉まへろと、手下を引きつれて追ひかけ、行けども行けども追ひつけなかつた。もつと追つてみろと深追ひをやり続けた。

平井兄弟と雲龍とは日が傾いたので墓場を出て、小径をめぐりめぐつて辰蔵の家の前へ出たのが、夕七つ半（午后五時）ごろである。辰蔵は確かにゐる、年とつた女が一人ゐるが、刃の色をみたら逃げるだらう、逃げなかつたら追払へと、外記が表口からはひり、九市郎は門口の外で刀を抜いて、辰蔵が逃げて出てきたらと待ち受けた。雲龍は尺八を武器に裏口へ廻つた。

前にもいつたやうに二間四方の家だから、表口からはいつた外記は、辰蔵が肌ぬぎになつて、三本立てた蝋燭あかりの下で、刀を研いでゐる姿がすぐ眼についた。辰蔵は人の気配がしたからだらう、顔を向けたその途端に外記が、敵討なり左様心得ろといふと、辰蔵が大きい眼を刮と剥き、心得たといひながら手をのばし、傍らに立てかけてあつた拵えつきの脇差をとつて抜き放つたが、研ぎに出てゐる脇差だつたので、目貫が抜いてあつたから、刀身は鞘の中に残り、柄だけが辰蔵の手に残つた。外記がその左の肩へ深く斬りつけた。辰蔵は叫びもせず、身を翻えして裏口へ逃げて出た。その出ハナを待受けてゐた雲龍が、逃げられぬと声をかけて片手突きで突き戻した——尺八で殴つたといふ説が多く流布してゐるが——。そのとき外記の脚へ煮焚きの雇ひ女が飛びついた。そこへ表口で自烈きつてゐた九市郎が、顔を火の玉のやうにして飛び込んできて、外記の脇をスリ抜けるのと、辰蔵が雲龍に追ひ戻されたのが殆ど同時で、九市郎は出会ひ頭のやうに辰蔵の左の腕を斬つて落し、余勢で畳を三寸も切り裂いた。続いて外記が獅噛みつく女を刎ねのけ、二の太刀を辰蔵の左の

首筋に入れたのが深く、首は落ちるばかりになつた。裏口から雲龍がはひつて来たその足許で、外記が倒れてしまってゐる辰蔵に止殺を、左耳の或るところに加はへた。と九市郎が既に事終つたのに辰蔵の顔に、こいつめがと斬りつけ、左の眼の玉を切り砕き眼の下に切り疵をつけた。外記が叱りつけると九市郎は叱られる筈はないといふ顔をした。雲龍は無表情であつたといふ。辰蔵は三十二歳であつた。

金比羅源右衛門は長追ひ空しく引返す途中で、鳴り響く盤木の音を聞き、何か又あつたぞと急ぐうちに、三人の強盗が刀研ぎの家へ押入り、与之助は殺され、雇ひ女は這つて逃げて助かつた、強盗共は家の中にまだゐると聞き、駆けつけてみると、村の人々が獲物を手にして、与之助の家を遠巻きにしてゐる処であつたので、伝蔵のところの盗人が今度は殺し盗りになつたかと召捕る気で村の人々を励まして、ともども家へ近づくと、三人は家の前へ出て並むで座り、外記が敵討にてござると先づいつて、姓名と生国を名乗つた。源右衛門は聞いてゐるうちに合点がいつて、お言葉疑ひませぬお目出たう存じますといひ、菰を見付けて引き出し三人に敷かせ、ゆうべは無常場でお明かしと存じます。粗末ながらこれをと源右衛門は、自分の腰弁当と手下二人の腰弁当を三人に渡した。三人は腹がへつてゐたので、世にも旨さうにそれを食べた。

そこへ他出中であつた庄屋米田伝右衛門が駆けつけた。

平井兄弟と雲龍とは、その晩から庄屋伝右衛門方に三晩泊つた。ここは高松藩領分で、最初に出張してきたのは支配代官の中村九兵衛、次で高松から徒目付が検視にきた。

六月十五日朝七ツ（午前四時）、高松藩から派遣の物頭木内与三右衛門・中村茂太夫が馬乗で六十人の部下を率ゐて、三人を高松へ護送した。三人ともに駕籠で、足軽が六人づつ駕籠脇についた。行列の先頭は村役人・大庄屋・小庄屋・郡代組・郷方手代・代官の順、郡奉行も馬乗で部下を随へて列に加はつた。この行列の長さは五町に及むだ。羽床から高松までは約六里、その間、見物の人出が盛んであつた。高松に近くなると瓦版早刷りの粗略ながらそのころの新聞代用品がもう見物の中で売られてゐた。

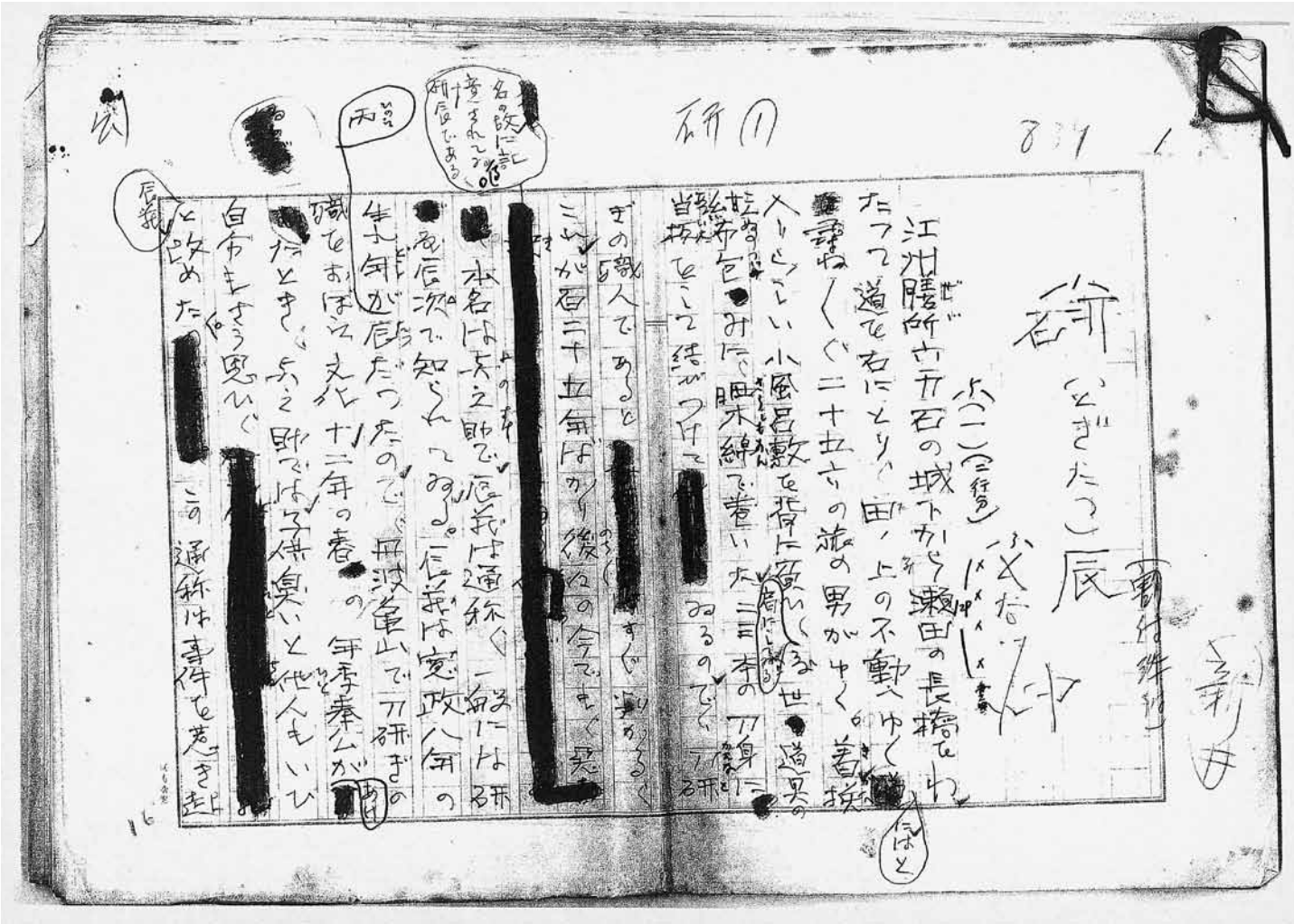
高松城下では三人とも、西新通り町の津軽屋孫兵衛方を宿所に至れり盡せりの優遇を高松藩から受けた。

といふことを江州膳所藩では、六月二十一日高松藩町奉行付き同心二人が供の者二人をつれて、知らせに来たので始めて知つた。かうなると敵討願ひを却下したことなどは棚上げにする外ない。世の聞こえと大名の見得とで諸役人連合の評定をひらき、百人の同勢で華々しく三人を迎えとることになつた。物頭は榊原新八郎・横田喜三郎、奉行高橋弥八郎、徒目付林吉兵衛、その他に人に知られた士が幾人もはひつてゐた。膳所からは三人の衣類一揃ひを持つて行つたが、高松藩からも三人に一揃ひづつの衣服を給されてゐた。このときの膳所藩の支出は少いことではなかつたらう。迎え取つた後に更めて御礼の使者が礼物をもつてゆき、関係の上下すべての人に、それぞれ物か金か銭を贈るのが慣例であるから金がかかる。貧乏大名の旧家来が敵討を他国でやると、藩の誉れでござると口ではいつても、藩政を執つてゐるものは、その金策に頭を悩ませたものであつた。このときの膳所藩もさうであつたであらう。

膳所に帰つた九市郎は二十石加増になつて、八十石で平井家再興となつた。が、兄の外記は九市郎よりちよつと人間が上だが、膳所藩のものではないといふので何もされなかつた。では水口藩ではといふと、養家を去つたのだから、これも藩とは関係がない。養家に復縁すればだが、武内家には養子が出来てゐてそれも出来ない。そこで水口藩は世間の評判の手前、放つても置けないので、平井外記を六両三人扶持で給人に準ずといふ低いものに抱へた。藩主は加藤能登守明邦で財政まことに苦しいものがあつたが、この敵討の原因に批判が加はへられて、外記は優遇されなかつたと思へる節があるやうである。雲龍の黒杭才次郎は膳所藩が十五人扶持家作料金三十両で給人にした。後にもつと地位のいい家に望まれて婿にゆき、粟谷才次郎貞利といつた。その宅が明治の初めまで藩黌遵義堂の近くにあつた。

このことが絵入りの一枚の刷りとなり、唄にされ、語り草となり、芝居にまでなつて、敵討の〝討人びゐき〟の為め、敵の辰蔵は少年のときから悪かつたとされた。今と雖も、その点に変り

はない。

辰蔵の研辰が哀れまれてゐるのは、故郷だけであらう。村人はその当時、銭を出しあひ労力を出しあひ、今のいひ方だと香川県綾歌郡羽床村大字長利に墓を建てたのが、現存してゐる筈である。辰蔵が討たれた建坪四坪の家は明治末年までは残つてゐた。今は勿論ない。

かう書いてきてこの中で責められていいものは、樋口（「羽賀」の誤りか―出口）といふ仮名で書いた、刀研ぎだから刀がない訳でもあるまいと、舌の爆薬で辰蔵に凶行の動機をつくつた人物である。が、いつの時もかういふ人物が責められたことはないやうである。